

## 江見太郎原作・中野拓哉脚色「いのちの電話物語」

### 第1話(前編) 見よ、すべてが新しく

ナレーション 和歌山県白浜は、熱海と並ぶ日本屈指の温泉地で、千畳敷、三段壁、白良浜などの景勝と共に、観光地として知られています。しかし一方では、三段壁からの投身自殺者があとを立たず、自殺の名所という悲しむべき一面も持っています。1979年、江見牧師は、「白浜いのちの電話」を開設し、死に急ぐ人々を救出するために、奉仕してきました。そのエピソードはやがて「涙をもうぬぐって - いのちの電話は鳴りやまず」という1冊の本にまとめられました。これは本当にあったお話を基にしてありますが、江見牧師以外の人物名は架空のもので、またラジオドラマ用に編集・脚色してお届けします。

### (音楽)

ナレーション たった一人しかいない自分を  
たった一度しかない人生を  
本当に生かさなかつたら  
人間、生まれてきたかいがないではないか

(山本有三「路傍の石」より)

重大な決断をする前に、一度ぜひお電話を下さい。あなたのお力になります。  
牧師ナレーション これは白浜の三段壁に掲げられている「いのちの電話」の看板の言葉です。牧師なのに、なぜ聖書の言葉を書かないかと不審に思われるかもしれません。しかし、人にはそれぞれの宗教的背景があり、聖書、キリストと聞いただけで拒否反応を起こす方もいらっしゃいます。色々思案した挙げ句、先ほどの言葉にしたのは、そんなことで、死に急ぐ方を黙って見過ごすわけにはいかなかったからです。この看板は、居間まで多くの人の命を死のふちから呼び戻してきました。今回お話しする山本美沙子さんもその一人です。

(効果音) 旧式電話の音。「チリリリン。チリリリン。」

牧師 (少し眠そうに)はい、いのちの電話です。どうなさいましたか？

美沙子 ...たし、...にたい(わたし、死にたい)。はあー、はあー(荒い息遣い)。

牧師 (今度ははっきりと)もしもし？ もしもし。

(効果音) 海の音。

牧師 今どこから電話していますか？ もしもし、今どこですか？

美沙子 う...み...。(も)う...だ(め)。

牧師 とにかくそこで待っていてください。いいですね。その場を離れてはいけませんよ。すぐに参ります。

牧師(モノローグ) 死ぬんじゃない。待ってなさい。待ってるんだ。

牧師ナレーション 急いで駆けつけると、果たして電話の主はがけっぶちに倒れ伏していました。

牧師 もしも、あなたですね、電話をかけられたのは。

美沙子 (せき込んで)...うう。(弱々しく何かを吐き出す音。)

牧師ナレーション 電話の声ではおおよそ 50 代の婦人と踏んでおりましたが、驚いたことに、それは二十歳そこそこの若い女性でした。よろけながら起き上がろうとした弾みで、何かを吐き出した時に鼻をかすめたのは、薬物特有のにおいでした。

牧師 大丈夫ですか？

美沙子 はい...。

牧師ナレーション 幸い、飲んだ薬物は少量だったようで、彼女は一命を取り留めました。(間) 大学に入り、成人式を目前にした彼女を死に至らしめようとした原因は、同じ大学の上級だった交際相手との失恋でした。

直美 ちょっと美沙。陽ちゃんとうなってるのよ。もう告白したの？ 今年のクリスマスまでには、って言ってたじゃない。

美沙子 (かぶせて)ちょっと直見先輩。シー。ほかにはまだだれにも言ってないんですよ。もう。(小声で)まだです。でも今、駄目押しプレゼントの作成中です。

美沙子ナレーション わたしの初恋でした。同じ大学の先輩で青木陽一郎さんといいます。特にこれといった意思表示はありませんでしたが、日ごろの彼の態度から見て、自分に好意を寄せてくれている、そう信じて疑わなかったんです。

陽一郎 やあ美沙ちゃん。直ちゃん。今週は初めてだよ。

直美 何よ。美沙子のほうを先に呼ぶわけ？ いつもノートを貸してあげてるのに。

陽一郎 そんなことないよ。たまたま美沙ちゃんと目が合ったから、先に声をかけただけだよ。何だよ直ちゃん、やいてんの？

直美 そんなわけないでしょ。ま、いいけどね。ねえ？(美沙子の顔をのぞき込む)

美沙子 (照れながら)う、うん...あの、青木さん。

陽一郎 (かぶせて)あ、こいつね、高校の時の親友で角田俊介。大学は違うんだけど、時々一緒に飲みに行ったりしてるんだ。

俊介 こんにちは。悪友ですけど。よろしく。えーと、君が直美さんで、そちらが頭がよくて字のきれいな美沙子さんだ。

美沙子 ええー、そ、そんな。何でわたしの名前を知っているんですか？

俊介 青木のやつ、いつも言ってるもん。助かってるって。

直美 ということは後輩の美沙子にまでノート借りてるの？ あきれた。

陽一郎 だって、去年落とした授業あるし、美佐ちゃんのノートは授業に出ているより分かりやすくてきれいだから。

美沙子 え、そ、そんな。わたし、わたしなんかの字で読みにくいんじゃないかと....

俊介 青木、それだけじゃないんじゃないの？

陽一郎 何だよ。ヘンなこというなよ。彼女が気にするだろ。

美沙子ナレーション てれたように笑う青木さんの表情にも、わたしへの愛を感じてしまったのでした。わたしは何とか彼の気持ちを確かめたくて、自分のほうからデートに誘うようになりました。

美沙子 すみませんでした。つまらない映画に付き合わせちゃって。

陽一郎 そうでもないよ。たまには、ああいう文学的な作品もいいよね。

美沙子 そうですか？ でもアルバイトとかで忙しいのに。本当に大丈夫だったんですか？ もしかして無理して...わたしなんかのために。

陽一郎 そんなことないよ。今日は昼飯までおごってもらっちゃって。本当に助かった。朝飯食べてなかったし、金もなくてね。

美沙子 クリスマスですね、もうすぐ。青木さんて、お付き合いしてる方とか、...いらっしゃるんですか？

陽一郎 いないよ、そんなの。ごめん、今日はこれで。これからもう一つアルバイトがあるんだ...あ、それと、明日「日本教育文化論」のノート借りられるかな。今度はごちそうするから。

美沙子 ごちそうだなんてそんな...。ノート、明日ですね。分かりました。今度また、映画付き合ってもらえますか？

陽一郎 ああ、いいよ、もちろん。じゃ、また。

美沙子ナレーション あれはクリスマスも近い荒れ模様の寒い日でした。幾日もかかって編み上げたセーターに思いのすべてを託して、彼がいつも使う市電の駅のホームでひたすら彼を待っていました。

陽一郎(回想) (エコー)美沙ちゃんのノートは分かりやすくてきれいだから。(間)彼女なんていないよ、そんなの。

美沙子ナレーション 恐らく長い時間だったのですが、わたしにはそんな時間の感覚なんて、どこかへ行ってしまったかのように短いものでした。わたしの前に彼が降り立った時には、心臓がドキドキ高鳴ってどうにかなってしまいそうでした。彼はわたしを見て驚いたようでした。わたしはセーターの包みを差し出すと、抑え切れない思いのすべてを込めて彼に言いました。

美沙子 わたしの愛を受け取ってください。

美沙子ナレーション 彼の反応は冷たいものでした。包みを無造作に突き返すと、困ったような顔で彼は一言こう言ったのです。

陽一郎 おれ、君の顔が嫌いなんだ。

美沙子ナレーション それが返事のすべてと言っていいものでした。そのあと、どうやって家に帰ったのか全く覚えていません。わたしの頭の中に“死”という言葉が浮かび、それは日に日に強く心に覆いかぶさっていきました。

美沙子の母 (美沙子の部屋の外で)あなた。美沙子、ここ1週間全くしゃべらないんですよ。

美沙子の父 そうだなあ。少し話してみよう。

(効果音) ドアをノックする音。  
父 おい、美沙子。どこ行んだ。こんな夜遅くに。美沙子！  
牧師ナレーション それが、彼女の死への旅立ちでした。(間)教会に向かう車中も、境界に着てからもずっと口を開かなかった彼女ですが、2日目になってようやくわたしたち夫婦の誠意が通じたのか、少しずつ心を開き始め、先ほどの告白をしてくれました。彼女がイエス様を救い主と信じ、生まれ変わるまでにそう長くはかかりませんでした。程なく彼女は、重度心身障害児の施設に勤めることになり、今では施設長代理を務めるまでになりました。それから何度か、彼女から喜びと感謝にあふれた手紙を頂きました。彼女の便りはこう結ばれていました。  
美沙子 白羽までなくなったはずの命だから、気の毒な人々のために使いたいのです。  
ナレーション だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(コリント5:17)

#### 第2話(後編) 生かされた者

ナレーション 「涙をもうぬぐって いのちの電話は鳴りやまず」より、今週は第2話をお送りいたします。  
牧師ナレーション 竹村真嗣君の母親、玲子さんから相談の電話を受けたのは、白浜で「いのちの電話」を開設して間もなくのことでした。  
母 (電話フィルター音)(泣きながら)今度という今度は...我慢も、忍耐も、底を突きました。あの子が、血まみれになって、...カッターで自殺を図りまして...。  
牧師ナレーション 彼女は涙ながらに訴えました。竹村真嗣君はある公立の小学校の3年生。見た目にも体の不自由さが目立つ重度の小児マヒで、障害者学級に通っていました。そんなある日、帰宅途中のことでした。  
小学生1 なあ、見てみる。あいつ、特殊学級の竹村じゃないか？  
小学生2 (呼びかけ)なあ竹村、楽しそうだな。顔中に泥付けて。  
真嗣 うお、うお、んぐ。(興奮してしゃべろうとするが言葉にならない。)  
小学生2 こいつ、しゃべれもしないのか。おまえ、悪もんだな。こうしてやる。  
(効果音) 「べちゃ、べちゃ」と泥の塊を投げつける音。  
真嗣 (くぐもって)やめろよ。  
小学生1 何か言ったぞ。しゃべれないように、この泥団子、食わしてやる、ほれ。そこでこの棒を鼻に入れてやるからな。じっとしてろよ。ほら、おまえ、押さえてろ。今ズボン脱がしてそこの枝をケツに突っ込んでやるからな。ほら、動かないように押さえとくんだぞ。  
真嗣 (泣き声で)やめろよ、やめろよ。  
大人1 うあっはっは。何してるんだ。こんなところでケツ丸出しで。

大人2 ほーんと。(からかって)何してんだ。うぁー、何だ、あの格好は。  
(代わる代わる笑い声。F0)

母ナレーション 真嗣は元旦に生まれました。代々の母系家族の家に待望の男児誕生とあって、家族の喜びもひとしおでした。

父 よくやった、母ちゃん。絶対男だと思って名前考えといたぞ。「真嗣」だ。まことの「真」に家を嗣ぐの「嗣」と書いて、真嗣だ。

母ナレーション ところが、喜びもつかの間でした。生まれてしばらくたって、泣きもせず、授乳もはかばかしくいかず、ただ寝ているばかりなので、わたしも回りもだんだん心配になってきました。

ある日、心に決めて小児科医に乳児相談に行ったところ、果たして小児マヒであることを告げられました。全身から血の気が引く思いでした。医者だって人の子、誤診ということもあり得ると自分自身に言い聞かせ、今度は父親も伴って、県立医大に出向き診察を受けましたが、結果は同じでした。

母 (涙声で)何とか助けてやってください。この子を...(おえつ)

医者 わたしどもでもこればかりは...。命まではお引き受けできませんから。

母ナレーション 帰り道、わたしたち夫婦は無言のままでした。駅から夫は仕事場方面の電車に、わたしは家に向かう電車に乗り、抱き抱えた真嗣と2人きりになった時でした。

母(モノローグ) こんな子を...こんな子を育ててみても、この子も一生苦労するし、夫婦仲もうまくいかなくなってしまうだろう。そんな惨めな思いをするならいっそのこと、この子と一緒に、電車にでもひかれて死んだほうが...。次の電車に...飛び込もう。

母ナレーション それでも、電車が一台入ってくるたびに、母親としての自覚が死の誘惑から踏みとどまらせ、とうとう死ぬことはできませんでした。あれから8年。私は必死の思いで子供と共に生きてまいりましたが、今度という今度は我慢も忍耐も底を突きました。先日、子供が帰ったつきり姿を見せないの、心配になり、夜になって部屋をロックしたところ、内側からロックされて応答がありませんでした。おかしいと思い、すぐさま窓ガラスを割り、カーテンを引いてみると、血まみれになって倒れているではありませんか。カッターナイフで自殺を図ったのです。人並みの力がなくて、幸い一命は取り留めましたが、それからというもの、怖くて怖くて一刻も目が離せません。

牧師ナレーション その日、真嗣君は、帰宅途中、数人の小学生にひどいいたずらをされ、はやし立てられたのです。真嗣君は登校拒否に加え、すっかり人間不信に陥ってしまいました。それはいたずらをした子供たちと言うよりむしろ、一緒になって笑った大人に対するものだったのかもしれませんが。そんなわけで早速訪問したわたしに対する真嗣君の反応は冷たいものでした。部屋の片隅に身を縮め、

壁に向かったまま振り返ろうともしない真嗣君の肩の辺りに、例えようもない悲しみと怒りの色がにじみ出ていました。わたしはただひたすら神様の助けを求めながら、彼の心に向かって語り掛けました。

牧師　ごめん。ほんとにごめんね。おじさん、真嗣君に何もしてやれない。何も言う言葉がない。だって、おじさんもあの時、真嗣君を笑って、助けようとしなかった大人たちとおんなじ仲間なんだから。(次第に泣きながら)ほんとにごめんね。つらかったろうね。言葉にもできず、ただ相手のなすがままで。おじさんも同じことしてたんだって、今はっきり分かった。2000年前に十字架に架かったイエスという人も、みんなからけられて、裸にされて、つば引っ掛けられて、さらし者になって十字架の上で死んでゆく時、周りのお弟子さんや仲良くしてた人たちもみんな逃げてしまって…。そんな逃げた仲間におじさんも入っているんだ。ほんとにごめん、ごめんね。おじさんたちを許してね…。

牧師ナレーション　ややあって振り返った真嗣君の目に、驚きとろうばいの色がかすめました。そしてたどたどしい言葉ながら意外なほど落ち着いた口調で、真嗣君はこうつぶやきました。

真嗣　なぜおじさんが謝るの？ 僕のために…僕なんかのためにどうして？

牧師ナレーション　わたしは心を込めてイエス様の愛を語りました。どうしてそのように十字架に架かって死ななければならなかったか。このイエス様を信じたらどう変えられるのか。真嗣君はいつしか居住まいをただし、わたしの話に熱心に耳を傾けていました。その夜、真嗣君はイエス・キリストを救い主として心の中に迎え入れました。(間)再びわたしが真嗣君のもとを訪れたのは、ある雨の朝のことでした。真嗣君の心の傷もようやくいえ始め、障害学級に登校するところでした。

牧師　なあ真嗣君。今日は合羽<sup>かっぱ</sup>をよして、傘を差して行ってみたら？

真嗣　傘を差したら、つえが持てないよ。

牧師ナレーション　困惑したような返事が返ってきましたが、わたしは心を鬼にして言いました。

牧師　やりもしないで、できないと弱音を吐くんじゃない。とにかく一度やってみなきゃ分からないだろう！

真嗣　(べそをかきながら)そんなこと言ったって…。つえがなくなったら…。

牧師ナレーション　真嗣君は半べそをかきながらも傘を差し、つえなしで小雨の中をよろよろと歩き始めました。母親が見るに見かねて手を添えようとしたが、わたしはその手を、気づかれぬように制しました。(間)その日、帰宅した真嗣君は母親の気遣いもよそに、目を輝かせてこう言ったそうです。

真嗣　僕、明日からつえなしで学校に行くよ！

牧師ナレーション　その雨の日が、生まれて初めて松葉づえに頼らずに彼が自力で歩いた記念すべき日でした。

真嗣　お母さん。やる気になれば何でもできるんだね。でも僕、忘れないよ。僕にはイ

エス様がついてるんだ。

母

(手紙の声)あれから、あの子は先生からお勧めいただいたように、できるだけ人に頼らずにやろうとしています。それに教会学校にも通い始めました。先生がお別れに「ナザレのイエス・キリストの名によって、歩きなさい。」(使徒の働き 3:6)という聖書の言葉を下さいましたね。目に見えるようです。あの子が歩き回り、神様を賛美している姿が…。その日はきっと来ますわ。

牧師ナレーション

その年の夏休みに、真嗣君はわたしに会うために、4 キロの道のりをわざわざ歩いてきました。汗とほこりにまみれた彼の上気した笑顔を見て、わたしは感動の余り、言葉を失ってしまいました。夢中で差し伸べたわたしの腕の中に彼は飛び込んできました。その全身には、生かされた者の確かさが息づいていました。

(完)